The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	動詞のアスペクチュアルな素性について
Author(s)	森山, 卓郎
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1983, 17, p. 1-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47753
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

動詞のアスペクチュアルな素性について

森山卓郎

一　問題のありか

アスペクチュアルな対立のある動詞[1]のシテイル形は、「走ッテイル」（ふつう、進行中）「結婚シテイル」（ふつう、結果の状態）のように、アスペクト的にみて、進行中か結果の状態かのどちらかの意味に大別される。[2]アスペクトの研究は、もともとここから始まっていて、「走ル」のような動詞の類、「結婚スル」のような動詞の類というふうに、動詞分類が出発点であった。現在の諸研究も、アスペクチュアルな形の認め方に違いがあるにしろ、基本的には、この同じ線上にあるといってよいであろう。

しかし、こうした従来の研究には、根本的に次のような問題があるように思われる。

第一に、アスペクトが関わる領域の問題である。例えば、先程あげた「結婚スル」も、

①多クノ友達ガ次々ト結婚シテイル。

という文では、くりかえしとしての進行中と解釈されるが、もちろん、主体が複数であること、「次々ト」のような

副詞があることとによるのであり、動詞だけの意味から最終的なアスペクトの意味が決められているわけではない。このような現象をも包括的に考えるには、最終的なアスペクトの意味が、「何が、ドノヨウニ、ドウスル」という〈出来事〉のレベル――筆者は、これをアスペクトプロポジションと呼ぶ――において決められると考えなければならないのである。(3)

つまり、動詞の動きとしての意味が、他の条件によるぬりかえもなしに、そのまま、〈出来事〉としても同じアスペクトの意味を実現することもあるが、①のように、他の条件によってぬりかえられ、〈出来事〉としての意味が違ってくることもあるわけである。このように、アスペクトの意味のあり方を考えるには、最終的なアスペクトの意味が決まるアスペクトプロポジションのレベルと、その構成要素である動詞の意味のレベルとを分けて考えなければならないのである。従来の動詞分類も、これから本稿で分析する動詞の意味も、ともに動きを一回的なものと捉える後者のレベルであり、アスペクトの意味を最終的に決めるレベルではない。こうした位置づけは重要である。

第二に、動詞の意味の扱い方の問題がある。一つの動詞でも単一の動きをあらわすとは限らない。例えば「移ス」という動詞でも、

②今、太郎ハ溜池ノ水ヲ田圃ニ移シテイル。

なら、灌漑の作業をすることをあらわして、進行中に解釈されるが、

③今、太郎ハ池ノ管理権ヲ市ニ移シテイル。

なら、移管することをあらわすのであり、進行中と解釈されることはないであろう。「何ヲ」にあたる言葉によって、「移ス」のあらわす動きは大きく違ってくるのである。アスペクトの意味が問題となるのは、あくまで、動詞があら

わす動きの意味的性質なのであって、動詞だけをとりあげても分析できないことがあるのである。本稿では、この問題を根本的に解決することはできないが、必要に応じて格成分を補って考えることにする。

第三に、シテイル形以外のアスペクト形式における動詞のアスペクチュアルな意味の検討不足がある。[4]

アスペクトにかかわる現象は、シテイル形だけに限られているのではない。必要最小限にとどめても、次にあげるだけの形式があるのであり、こうした形式の意味、用法について考えることも必要なのである。[5]（図(1)）。

実際、シテイル形の意味を問題にとりあげる研究でも、そのシテイル形の意味自体が決めにくいということがある。例えば、次の文のシテイル形は、進行中、結果の状態、のいずれの意味とみるべきであろうか。

③太郎ハ鉄棒ニブラサガッテイル。

④太郎ハデモニ参加シテイル。

従来研究の前提となってきたシテイル形の意味も、案外、安易に決められていたのではないであろうか。この問題の根底には、アスペクト的にみて、動詞がどれだけの事態をあらわすか、が明らかでないということがある。これも、シテイル形以外のアスペクト諸形式において、動詞の意味のありかたを分析していくことで明らかになる問題であるといえる。

以上、簡単ではあるが、従来のアスペクト研究において問題だと思われる点三

複合動詞系	補助動詞系			時制相関	(形式名詞系)
∅ シ始メル シ出ス シ続ケル シ終ワル	∅ テクル テイク	∅ テシマウ	∅ テイル ツツアル (テアル) (テオク)	∅ タ	∅ ママダ トコロダ 最中…… ナガラ

図(1)　テンス・アスペクトの構造(シンタグム)と体系(パラダイム)

つについて述べた。本稿では、このうち、第三にあげた問題点をとりあげて考察しようと思う。アスペクト諸形式を見渡したうえで、動詞のアスペクチュアルな意味のありかたを考えるということは、これからの研究の足がかりとして重要だからである。

さて、図(1)であげたような形式について、それが動詞のどんな意味特徴に関わるのか、を考えていくわけであるが、個々ばらばらに意味特徴をとりだすのではなく、ある程度一般化して意味特徴をとりだすことが必要である。そのような意味特徴を一般化したものを、ここでは、素性とよぶことにする。素性という言葉を使って言い換えれば、本稿は、動詞のアスペクチュアルな素性を、アスペクト諸形式との相関のなかで抽出して、素性同志の関係を調べるとともに、具体的な動詞の用法のなかで、それらを検討し論述することを目的とするものである、といえる。

二　持続性

動詞のあらわす動きや、それによって生ずる事態に、何らかの持続的な期間が認められる場合、その動詞の意味特徴として、**持続性**という素性を設定したいと思う。[6] 持続性があれば、シ続ケルという形式が承接するほか、並起のシナガラが承接したり、単純な期間成分（〜間、暫ク、等）が共起しうる。例えば、歩ク、立ツなど、多くの動詞には持続性があり、「歩キ続ケル」、「暫ク立ツ」などと言えるのである。これに対し、例えば、

目撃スル、一瞥スル、見カケル、命中スル、ソレル、決マル、却下スル、承認スル、起コル、始マル、始メル、終エル、終ワル、設ケル、倒産スル、ウチ負カス、申シ込ム、乗リ込ム、到着スル、驚ク、アキレル、

など、主体の変化、動作を問わず、動きの展開する期間もしくは、動きの結果を維持する期間をもたない動詞には、

この持続性はない。これを無持続動詞と呼んでおこうと思う。無持続動詞は、くり返し的な〈出来事〉にならない限り、持続期間がないことになり、シ続ケル、シナガラは承接しえないし、単純な期間成分も共起しえない。もちろん、持続性の下位の素性に呼応する諸形式も承接しない。

持続性には二種類ある。次の二例は、同じシ続ケルでも意味が少し違う。

⑥勉強シ続ケル

⑦下ヲ向キ続ケル

⑥の持続部分は、「勉強スル」という動きの展開の持続であるが、⑦の持続部分は、「下ヲ向ク」という動きの結果の持続である。このように、持続といっても動きそのものが展開する持続と、動きの結果を維持する持続とがあるのである。前者を**過程持続**、略して過程、後者を**維持持続**、略して維持と呼びたいと思う。

一つの動詞が、この二つの持続をもつこともある。例えば、

⑧戸ヲアケ続ケル

は、戸をあける動きの展開の持続と、戸をあけたあとの維持の持続との、二通りの意味をもっている。

⑧′ガラガラトガレージノ戸ヲアケ続ケル

⑧″換気ノ為ニ暫ク戸ヲアケ続ケル

⑧′は前者、⑧″は後者の例である。

こう考えると、持続性をもつ動詞でも、⑥の「勉強スル」のように、過程だけをもつもの、⑦の「下ヲ向ク」のように、維持だけをもつもの、⑧の「窓ヲアケル」のように、過程と維持との双方をもつもの、の三種類にまとめ

られることになる。

過程だけをもつものの例としては、

勉強スル、遊ブ、働ク、歩ク、走ル、歌ウ、言ウ、叫ブ、踊ル、殴ル、食事スル、燃エル、吹ク、光ル、悲シム、甘エル、

など、客体に変化をもたらさない持続動詞や、

溶カス、破ル、壊ス、作ル、刻ム、ツブス、殺ス、割ル、砕ク、崩ス、チョンギル、

など、客体に変化をもたらしても、その変化の結果の維持ということのありえない、非可逆的な変化をもたらそうとする動きをあらわす持続動詞がある。変化が非可逆的であれば、その変化によってもたらされた事態は、もう変わりえないものなのであり、維持するべき持続期間は問題にできないのである。[7]（破壊、生成の動きが多いようである。）

これに対し、

坐ル、ウツムク、立ツ、ブラサガル、ダマル、ジットスル、目ヲ閉ジル、持ツ、シャガム、ネコロブ、

など、姿勢や一時的様子をあらわす動詞や、

貸ス、借リル、預ケル、預カル、禁ズル、組ム、連合スル、背ク、浮カブ、浮カベル、（きまりなどを）守ル、

など、権利の所在などもふくめて、広い意味で態勢をあらわす動詞は、過程はないが、維持はある。これら（態勢動詞と呼んでおきたい）に共通するのは、態勢が成立するまでの過程は問題にならず、態勢が成立してからの持続だけが維持という意味でとりだせる、という意味特徴である。

さらに、過程と維持との両方をもつ動詞として、

近ヅケル、上ゲル、（明リヲ）灯ス、（戸ヲ）開ケル、（旗ヲ）揚ゲル、ブラサゲル、ヒックリ返ス、溜メル、湿ラセル、

など、客体に可逆的変化をもたらす過程動詞や、

近ヅク、遠ザカル、上ガル、下ガル、（戸ガ）アク、（戸ガ）シマル（連続的な動きで）、

など、主体が連続的変化をとげる為、動きに過程があって、しかもその動きによって主体が可逆的変化をとげるという連続的変化動詞、

着ル、ハク、（帽子ヲ）カブル、

など、主体の過程のとりだされる動作が、主体の変化となってかえってくる、いわゆる再帰動詞などがある。これら、過程と維持との両方をもつ動詞は、主体の持続的な動作が、何らかの持続すべき変化をもたらすような動詞としてまとめることができる。従って、これらの動詞は、みな、前提として、動きのなかに、何らかの変化が内在している。これら三種類の持続動詞は、すでに述べたように、シ続ケルの意味が違ってくるほか、期間をあらわす成分との共起関係も違ってくる。

期間をあらわす形式でも、～間、暫ク、といった、単に期間だけをあらわす形式と、～間カカッテ、～間ガカリデ、～間デ、などの動きの過程の期間や動きが成立するまでのアプローチ的[8]な過程の期間をあらわす形式との二種類がある。

過程しかもたない動きならば、例えば、

⑨太郎ハ三時間勉強シタ。

⑩太郎ハ三時間カカッテ勉強シタ。

のように、二種類の期間のあらわし方は、ニュアンス的な違いはあるにしろ、基本的には、同じく、過程期間をあらわしている。過程しかもたない動きは、単に期間を示しても、それは、過程（動きの展開）の期間をあらわすことになるからである。

ところが、それ以外の持続動詞、すなわち、維持だけをもつ動きや、過程と維持との両方の持続をもつ動きの動詞では、この二つの期間のあらわし方は、それぞれ別の期間をあらわす。例えば、

⑪太郎ハ五分間カカッテスワッタ。

⑫太郎ハ五分間スワッタ。

のなかの期間は、⑪では「スワル」態勢が成立するまでのアプローチ的な動きの期間をあらわすのに対し、⑫では、「スワル」態勢が成立してからの維持の期間をあらわす。また、

⑬太郎ハ七分間カカッテ旗ヲアゲタ。

⑭太郎ハ七分間旗ヲアゲタ。

の二文における期間のあらわし方も、それぞれ、別の期間（⑬は過程、⑭は維持）をあらわす、というように、意味的に対立してくるのである。これらの動詞では、～間というような期間だけをあらわす成分は、維持期間をあらわすのに対し、[9] ～間カカッテのような期間のあらわし方は、維持すべき変化が成立するまでのアプローチ的な働きかけの期間や動きそのものの過程期間をあらわすのである。こうした過程と維持との違いは、並起をあらわす

シナガラという形式においてもあらわれる。例えば、

⑮ソノ日オレハプロレスノ新聞ヲ膝ノ上ニヒロゲナガラ、基本的ニマヌケナ顔ヲシテウトウトシテイタ。（さらば国分寺書店のオババ）

のような例のシナガラは、動きがあったあとの状態をあらわす形式であるシタママにそのまま置き換えられる。すなわち、

⑮……新聞ヲヒロゲタママ……

とも言い換えられる。これに対し、同じ「ヒロゲナガラ」でも、

⑯太郎ハ畳ンデアッタ新聞ヲヒロゲナガラ妻ヲ呼ンダ。

という例では、シナガラをシタママに置き換えることはできない。つまり、⑮のシナガラは動きのあとの維持、⑯のシナガラは、過程、における並起をあらわすのである。言い換えれば、「新聞ヲヒロゲル」という動きには、「ヒロゲル」動きをする過程と、「ヒロゲタ」状態にしておく維持との二通りの持続がありうるのである。

このように、維持のシナガラは、シタママに置き換えられ、

⑰鉄棒ニブラサガリナガラ歌ヲ歌ウ

⑱鉄棒ニブラサガッタママ歌ヲ歌ウ

の二例は、アスペクト的に同じ事態をあらわすことができるのである。これに対し、過程しかもたない動詞では、このような現象はおこらず、

⑲歌イナガラ

⑳歌ッタママ

の二例が同じような事態を示すことは、まずないと思われる。

こう考えてくると、冒頭にあげた問題の一つ、「ブラサガッテイル」が進行中かどうかということについても、それなりの説明がつくように思われる。今述べたように、「ブラサガリナガラ」は必らず、「ブラサガッタママ」に置き換えられる。ということは、持続は持続でも、維持の持続だけをもっているということになるのであり、動きに展開過程はないのである。だから、「ブラサガッテイル」は、結果の状態とみるのが妥当かと思われる。では、次の問題として、なぜ、進行中と解釈することもできそうに思われたのであろうか。これは、「人間が何かにぶらさがる」場合、その維持にも力が必要だからではないだろうか。このことは、例えば、

㉑ゾウキンガ松ノ枝ニブラサガッテイル。

のような例では、維持に力が働いていないから、進行中的なニュアンスがでてこない、という事実から明らかであると思う。このように、態勢動詞には、維持にも力が働くということがあり、時には進行中的なニュアンスが生まれるのである。

このシナガラという形式には、主体に固有の制限があるようである。例えば、

㉒温度ガアガリナガラ……

などとは言えないが、「温度」という主体が、並起的に二つのことをおこしうる動作主体ではないことによると思われる。いくら持続性があっても、このように、主体が並起的に起こる二つの動きの共通の動作主体でなければシナガラは承接しない。

同じように、～間カカッテのような過程やアプローチ期間をあらわす形式は、動きの成立時点や動きの終わりの時点が明らかでなくてはならず、後述する終結性とかかわっている。

三　過程性

過程性とは、先述した過程持続（動きが展開する持続）に関する素性である。この過程の有無ということは、アスペクトについて考えるうえで、非常に重要なポイントである。シテイル形が進行中の意味で承接しうるにも、シ始メル、シ終ワルといった形式が承接しうるにも、前提として、過程がなくてはならないのである。

しかし、前提は前提であって、過程があるからといって、それらの形式がすべて承接するわけではない。個々の形式固有の制限があるのである。従って、固有制限の小さいものから考えていかなければ、過程の有無がわからないことになる。

固有制限の最も小さい形式は、筆者のみたところでは、シ始メル、シ出スといった始動をあらわす形式である。特殊な例を除けば、どんな動きでも始まりの点はとらえられるようであるし、逆に、始まりの点がとらえられるということは、その背後に前提として、なにがしかの展開時間、つまり過程があるといえる。この始動をあらわすシ始メルやシ出スなどの形式は、過程の有無を調べる際のテストフレームとして最適である。単一的な動きで、シ始メル、シ出スが承接しうれば、その動詞は過程をもっているとみてよい。

特殊な例外であるが、

時ガ経ツ、日ガ迫ル、経過スル、

など、時間の推移をあらわすものは、常に過程として動きが進行していくことになり、始まりの点も終わりの点もとりだせず、

㉓時間ガ過ギ始メル。

とはいえない。

なお、シカカル、シカケルは、動きの前段階をあらわすこともあるので、純粋に始動をあらわすとは言えない。例えば、

㉔昼食ヲ食ベカケル。

は、「食べ始メルコト」も、「食ベヨウトスルコト（まだ食べていない）」もあらわしている。

四　終結性

動きに終わりの点があるという素性を**終結性**と呼ぶ。[10] もちろん、過程を前提とするものである。形式としては、シ終ワル、シ終エル、などがある。

終結性があるためには終結点がなければならないわけであるが、このことは、言葉を換えていえば、動きの全体量が決まっているということである。動詞によっては、初めから動きの全体量が決まっているものもあるが、全体量ということのあり得ない、つまり、終結点をもち得ない動詞もあるし、また、条件によって終結点をもちうるものもある。基本的に、終結点の決まっている動詞を終結動詞、そうでない動詞を非終結動詞と分けておく。非終結動詞は、さらに、条件によって終結点をもちうるものと、もともと終結点をもちえないものとに分けられる。これら非終結動詞は、次節の進展性に関わる。

終結動詞は、初めから動きの全体量が設定されている。例えば、

建テル、作ル、繕ウ、（まとまった内容のものを）読ム、書ク、（映画等を）観ル、（蒲団等を）敷ク、（曲を）歌ウ、ヒク、説明スル、オシッコヲスル、入浴スル、話ス、並ベル、

などの動詞のあらわす動きには、終結点が一応決まっているとみてよい。これらの動詞は、一般に他動詞が多く、対象格にあたるものが、動詞との関わりにおいて、もともとある量的な限度をもっていることが多いように思われる。例えば、「家ヲ建テル」といえば、「家」が完成した時点で、「建テル」という動きは、必ず終結するのである。

また、これらの動詞では、タ形になった時、（例えば、建テタ、作ッタなど）ふつう、その動きが完成したことをあらわし、途中でやめたりすれば、シタとはいえないようである。[12] 例えば、途中で、「読ム」ことを放棄した場合、

㉕コノ本ヲ読ンダ

とは、ふつうは言えない。その場合は、

㉖コノ本ヲ少シ読ンダ

というふうに、「少シ」というあらたな全体量規定が必要なのではなかろうか。

これに対し、非終結動詞のなかでも、終結点をもちうる動詞は、全体量の規定された条件の下でシ終ワルなどが承接して動きの終結をあらわすことがある。

歩ク、走ル、モガク、遊ブ、働ク、増ヤス、減ラス、貯金スル、近ヅク、遠ザケル、上ル、フエル、ヘル、温メル、冷ヤス、

などの動詞のあらわす動きは、何らかのかたちで全体量が規定されれば、終結点ができる。

㉗歩キ終ワル

と、単にそれだけ言うのよりも、

㉘学校カラ家マデヲ歩キ終ワル

のように、全体量規定をつけた方が、表現としては安定するであろう。

これとは対照的に、終結点のありえない動詞もある。例えば、

愛スル、願ウ、怒ル、憧レル、心配スル、喜ブ、悲シム、疑ウ、ウヌボレル、頼ル、嫌ウ、痛ガル、痛ム、怠ケル、ショゲル、イバル、甘エル、

など、感覚、心理状態、態度などをあらわす動詞や、

暮ラス、営ム、生活スル、時ガ経ツ、老イル、

など、時間の進行にかかわる動詞などでは、もともと、動きの全体量ということが設定されえず、シ終ワルなどの形式は承接しない。もっとも、これらの動きでも、別表現で、

㉙痛ミガヤム

などと、終わりをとりあげることはできる。しかし、全体量があらかじめ設定できない以上、動きがその過程を終えるべき点である終結点はないとみるべきであろう。このように、終わりがあるかどうかということと、特にそれを終結点としてとりだせるかどうかということとは、必らずしも同じではないのである。

これら、終結点のありえない動詞には、非意志的な動詞が多いようであるが、意志性（自己制御性）と終結性との関係については、指摘だけにとどめる。

～間カカッテという形式については、すでに述べたが、これも終結性に関わる。すなわち、動きが成立したというべき終結点がありえない動詞（感覚動詞などの類）には、それまでの期間がとりだせず、

㉚＊二日カカッテ愛スル

などとは、まともな意味では言えない。

また、シテシマウという形式も、終結点がある時に限って、動きが最後までいったこともあらわせるようである。例えば、

㉛水ヲ最後マデ飲ンデシマウ

という時は、飲むべき水の量が規定されている場合に、「飲ム」動きの終結をあらわす。ただ、シテシマウという形式自体には、ムード的な意味やニュアンスがあり、その意味でなら、終結性はもちろん、持続性のない動詞にも、承接する。

五　進展性

動きの中に何らかの変化が内在していて、時とともにその程度が深化進展するという素性が**進展性**[13]である。シテイク、シテクル、シツツアルなどの形式（これらは、進展性以外の意味用法もある）[14]があるほか、次第ニ、段々、徐々ニ、等の副詞の共起が進展性に関わる。例えば、

㉜室温ガ上昇シツツアル。

㉝川ノニゴリモシダイニヘッテキマシタ。

（小学社会五）

などの例は、動きに何らかの変化が内在していて、それが次第にすすんでいくことをあらわす。

この進展性があるためには、動きの中に何らかの連続的変化がなくてはならないが、変化が連続的な動きは、一般に、終わるべき終結点がはじめから設定されていない。そこで、進展性は、前節の非終結動詞において問題になる素性だといえる。

進展性がある動詞には、

進メル、近ヅケル、増ヤス、大キクスル、広ゲル、温メル、（客体が連続的に変化）、進ム、近ヅク、増エル、小サクナル、広ガル、温マル、強マル、（主体が連続的に変化）

などがある。

六　変化と動作

これまでも、変化の有無についてしばしば言及してきたが、特にシテイル形の意味を考える際に、動きの中の変化のありかたは重要なポイントとなる。断わっておくが、この変化のありかたということは、今まで述べてきたような素性をつらぬいて問題となることであって、並列的に問題となることではない。

例えば、「殺ス」と「死ヌ」という場合、対象が「死ヌ」ことがなければならないのであるが、この「死ヌ」動きは、無持続的である。それならば、「死ンデイル」が進行中の意味になれないのと同様、「殺シテイル」も進行中の意味になれないはずである。しかし、

㉞太郎ガ庭デ豚ヲ殺シテイル。

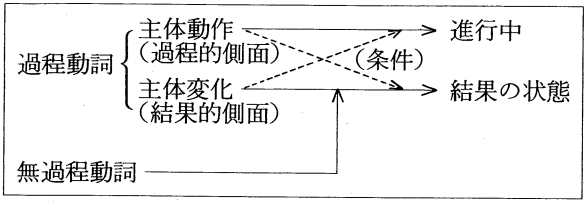
は、進行中で解釈されるであろう。現象的に、「死ヌ」ということと同じようなことをしめすはずの「殺ス」は、「殺シテイル」で進行中の意味にもなりうるのである。実際、「殺ス」という動詞は、「殺ソウトシテ何ラカノ行動ヲトル」ということも意味的にふくんでいるとみられるのである。このように、同じ「死ヌ」という変化が動きの中にあっても、それをもたらそうとする主体の動きに焦点をあてた、「殺ス」という動詞と、逆に、主体がどうなるか、という変化に焦点をあてた「死ヌ」という動詞とでは、アスペクト的な動きの捉え方は違うのである。

こうして、主体が**変化**するか、変化しないか（以下、主体の**動作**と呼ぶ）、ということが、アスペクト的にも問題になるのである。

主体が変化する動詞は、主体がどうなるか、という**結果の側面**が問題となるのであって、変化が連続的なものであるか、主体の変化に至るまでに主体の過程的動作があるか、どちらかの場合でない限り、一般に、過程をもたない。つまり、過程をもつ主体変化動詞は、上ルのように、進展性をもつ（変化が連続的）か、着ルのように再帰動詞である（過程のある主体動作によって、主体変化がもたらされる）かのどちらかの場合に限られ、それ以外は、過程をもたないし、過程は問題にならない。

これに対し、主体動作の動詞は、動作ということが、主体がどういう動きをするか、という**過程の側面**が問題とするものであるので、一般に過程をもつことが多い。主体動作で、しかも無過程という動詞は、一瞥スルのように、動きが瞬間的なものであるか、設ケルのように、動きの結果が成立してはじめて動きが成り立ったことになるような動詞で、それまでの過程が問題としえないようなものであるかの二通りしかない。それ以外の動作動詞は過程をもち、しかもその過程的側面に焦点のあたった捉え方がなされるのである。

ここで、シテイル形の意味を考えてみる。シテイル形そのものは、動きの継続状態を示すといってよい。そうすると、主体変化動詞のシテイル形は、動きの結果の側面にシテイル形の意味が呼応して、結果の状態の意味になるといえるし、主体動作動詞のシテイル形は、動きの過程の側面にシテイル形の意味が呼応して、進行中の意味になるといえるのである。



図(2) シテイル形の意味の決まり方

このように、シテイル形の意味のありかたは、その動きが主体の動作であるか、主体の変化であるか、ということに深く関わっている。それは、根本的には、動きの過程の側面が捉えられるか、結果の側面が捉えられるか、ということなのである。ただ、変化であれ、動作であれ、動きに過程がないならば、過程的側面をとりだすことは全く不可能であり、シテイル形で進行中の意味にはなりえない。従って、シテイル形の意味のきまり方は、次の図のように整理できる(図②)。すなわち、無過程なら必らず結果の状態、過程があれば、主体動作なら進行中、主体変化なら結果の状態に、それぞれなるのである。もっとも、これは、ニュートラルな条件においてのことであって、特に過程的側面をとりあげたり、結果的側面をとりあげたりする条件があれば、変更もありうる。

学説的にみれば、主体の動作、変化という観点の源流は、藤井(1966)の結果動詞に求められるが、今日のようなかたちで捉えなおしたのは、奥田(1977,1978)である。奥田論文は、それまでの継続、瞬間という観点を、シテイル形だけからの一般化であるとして、きびしく批判し、アスペクトがスル・シテイルの対立であることを強調し、アス

ペクトの意味の一般化は、スル・シテイル両形において有効な主体の変化、主体の動作という観点に求められるべきだとした。

しかし、すでにふれたように、主体変化動詞でも、過程をもつものはあり、それらでは、

㉟温度ガグングン下ガッテイル。

のように、グングンなどの副詞を共起させて特に過程をとりだせば、進行中で解釈されるし、主体動作の動詞でも、設ケルや一瞥スルなどのように、シテイル形で進行中になりえない無過程動詞もある。このことを無視して、単に動作か変化かという観点だけでかたづけてしまうのは適当でないと思われる。根本的なところでこうした現象をささえているのは、あくまでも**過程性**なのである。

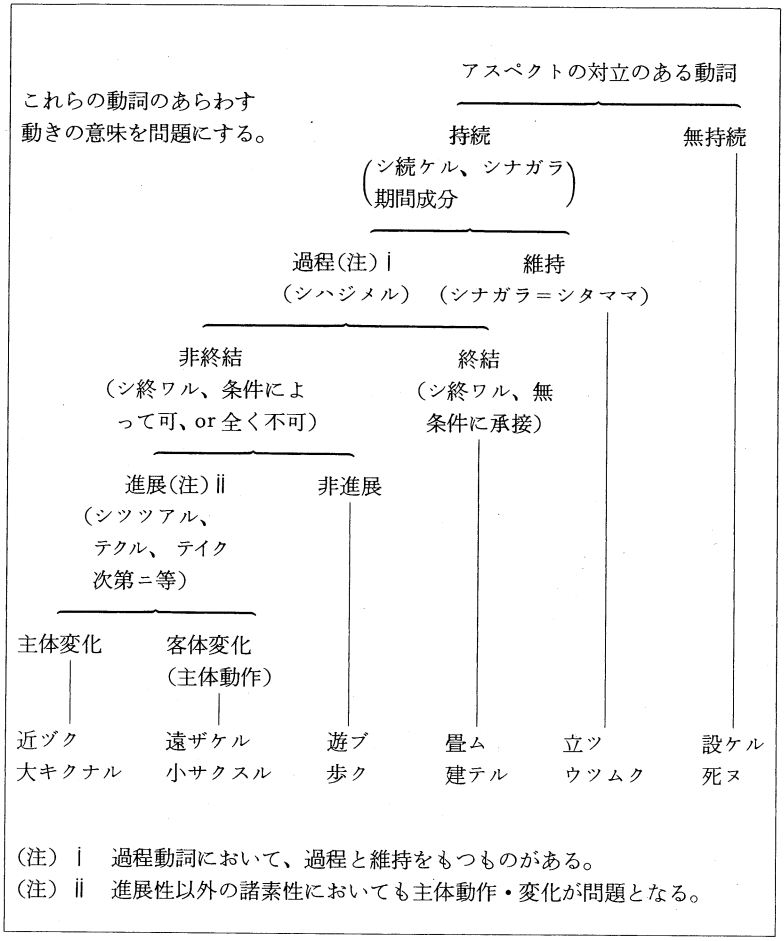
研究史を概括的にふり返れば、継続・瞬間という観点は、シテイル形の意味から過程の有無だけを問題にすることになったのに対し、動作・変化という観点は、裸のスル形の意味に重点をおきすぎた為に、過程の有無という前提条件を捨てさることになったと整理できるであろう。

なお、このような過程性の観点は、シテイル形の時間の長さからの片手おちの一般化ではない。期間成分との共起関係、シ始メルなどの形式との関係など、スル形シテイル形での意味のあり方すべてに通ずるアスペクトの意味の一般化であるといえる。

まとめ

最後に、素性間の関係を図にして、まとめにかえておく（図(3)）。

図(3) 素性間の関係



(注) i　過程動詞において、過程と維持をもつものがある。
(注) ii　進展性以外の諸素性においても主体動作・変化が問題となる。

参考文献

仁田　義雄（1982）「動詞の意味と構文」『日本語学』一・一
金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』（金田一春彦編）むぎ書房
藤井　　正（1966）「動詞＋ているの意味」同
奥田　靖雄（1977）「アスペクトの研究をめぐって――金田一的段階――」『宮城教育大学国語国文』八
　　（1978）「アスペクトの研究をめぐって（上）（下）」『教育国語』五三・五四
Comrie. B.（1976）『Aspect』Cambridge U. P.

注

（1）スル・シテイル両形が意味的対立をもつ動詞。以下、本稿でとりあげる動詞は、この動詞である。
（2）動きそのものの継続、くりかえし、をともに、進行中としてまとめ、結果の残存、経験、をともに結果の、状態としてまとめる、というように、大きなレベルでおさえる。
（3）筆者は、この点を中心に、一九八三年春の国語学会（同志社大）で研究発表をした。
（4）金田一（1950）、吉川（1971）などは、この点にも留意しているが、本稿のような位置づけのもとで各素性をとりだそうとするものではない。最近では、仁田（1982）がこの問題をとりあげている。
（5）シテイル、シテオクは、主体の意図性、ボイスにも関わるので、別にとりあげるべきであろう。（シテオクはアスペクト形式として認定すべきか検討の余地がある。）また、ここでは複合動詞もとりあげているが、例えば申シ込ムのように完全に語彙化した複合動詞ではなく、統語論的に問題となる複合動詞である。
（6）仁田（1982）も持続性をとりあげてはいるが、本稿のような過程持続と維持持続との理論的な区別はなされていない。（また、本稿で扱ったような現象もとりあげられていない。）
（7）この種の動詞では、持続性があっても、単純な期間成分と共起しない（＊二時間太郎ヲ殺ス）。注（9）参照。
（8）アプローチとは、動きが成立するまでの主体のはたらきかけのこと。カカッテは、「三年カカッテ妻ト離婚スル」など

のように、「離婚スル」動きそのものは未成立でも、それまでのはたらきかけの期間をあらわすことができる。

(9) 注(7)にあげた現象も、こうして説明できる。単純な期間成分は、本来ならば、維持期間をあらわすべきところなのに、維持ということがありえないので、注(7)のような動詞と共起しないのである。

(10) 仁田(1982)では、完結性とよばれる素性があるが、本稿のように三分されて考えられたものでない点が違う。

(11) 例えば、「雨ガ降リヤム」のヤムや、シックス、シキル、シトオスなどの形式については、終結性との関わりもあるようであるが、かなり語彙的な現象のようであり、ここでは別にする。今、扱い方を検討中である。

(12) Comrie(1976)P44にもそのような指摘がある。

(13) 仁田(1982)には漸次性があるが、主体変化に限られており、「勢力ヲ徐々ニ広ゲテイク」などの「広ゲル」などは扱えず、本稿の進展性とは違うものである。

(14) ツツアルは動きの直前を、テクル、テイクは、視点を含めた継続や、開始的実現(テクルのみ)、動きの方向性や空間的移動をもあらわす。